

『日本誌』及び『オックスフォード英語辞典』の双方に現れる日本語(2)

Japanese Loanwords That Appear in Both Kämpfer's *the History of Japan*
and *the Oxford English Dictionary* (II)土居 峻*
Schun DOI

Abstract:

In my paper published in the book *the Future of English Studies* (2010), I have mentioned of 74 words of Japanese origin that could be found in both *the History of Japan* and *the Oxford English Dictionary*. I have begun to list these words in the previous issue of this Bulletin. However, it was not possible to list all 74 words due to spatial limitations. Thus, I will here continue the list in alphabetical order, together with some explanations for each of the Japanese loanwords.

1. はじめに

拙稿 (2010: 92) において、E. Kämpfer 著『日本誌』*the History of Japan* (1727年初版) 及び『オックスフォード英語辞典』*the Oxford English Dictionary* (以下、OEDと略記する) の双方に見られる日本語は74語あることを指摘した。前稿 (2011) では、それぞれの語に簡単な説明・解説を加えながら、その一覧を掲げた。しかし、ページ数の制約のため、全ての語に解説を付けられた訳ではない。ここに、その続きを掲載していく。

OEDの各版の名称に関しては、前稿に続き、初版(1928年)・*Suppl. 1* (1933年)・*Suppl. 2* (1972年~1986年)・第2版(1989年)・*Additions Series* (1993年、1997年)を用いることにする。

2. 前稿で紹介した語の一覧

前稿で紹介することができた22語を以下に一覧しておく。括弧の外が『日本誌』の綴り、中がOEDの綴り、それに続いて対応する日本語である。

1. *Adsuki (adzuki)* 小豆
2. *Awabi (awabi)* 鮑
3. *Bon (Bon)* 盆
4. *Bonze, Bonsey (bonze)* 坊主・凡僧

5. *Cango (kago)* 駕籠
6. *Cobang, Cobanj, Copang, Kobani, Kobanj, Koobang, Cubang (kobang)* 小判
7. *Daimio, Dai Mio (daimio)* 大名
8. *Dairi (dairi)* 内裏
9. *Finoki (hinoki)* 檜
10. *Firo Canna (hiragana)* 平仮名
11. *Goradzi (Rōjū)* 老中
12. *Itzebo, Itzebe, Itzebi (itzebu, itzeboo)* 一分
13. *Jamatto (Yamato)* 大和
14. *Jedo (Yeddo)* 江戸
15. *Jetta (Eta, eta)* 穢多
16. *Kaja, Kai (kaya)* 榧
17. *Kaki (kaki)* 柿
18. *Kami, Cami, Came (kami)* 神・守・上
19. *Kanno, Canna (kana)* 仮名
20. *Katanna (katana)* 刀
21. *Katsuwo (katsuo)* 鰹
22. *Kattakanna, Catta Cana (katakana)* 片仮名

3. 『日本誌』とOEDとの双方に現れる日本語

さて、23語目以降は前稿の形式に従い、説明・解説を加えていく。項タイトル中、括弧の中がOEDの綴り、外が『日本誌』における綴りである。なお、項番号は、前稿からの通し番号とする。

* 愛知工業大学基礎教育センター非常勤講師

3・23 Kin, Ikin (ken)

間。尺貫法の長さの単位であり、主に土地の計測に使われてきた。偶然にもヨーロッパの *fathom* とほぼ等価であり、欧米の文献には 1 間 = 1 *fathom* と説明しているものも多い。メートル法では約 1.82 メートルである。

OED には *Suppl. 2* で採録されている。定義は「6 尺に相当する日本の長さの単位で、約 71.5 インチ (1.82 メートル)」となっている。用例文は 5 つ示されている。初出例は『日本誌』より “The *Tsjo* contains sixty *Kin*, or *Mats*, according to their way of measuring, or about as many European *fathoms*.” [1 町は彼らの測り方では 60 間 (畳 60 枚分の長さ) で、これはヨーロッパの 60 ファソムに相当する。] である。この例文で *Mats* とあるのは、畳の長辺の長さが 1 間だからである。『日本誌』からはもう 1 例ある。“This bridge is supported, in the middle, by a small island, and consequently consists of two parts, the first whereof hath 36 *kins*, or *fathoms*, in length, and the second 96.” [この橋は途中の小島に架かっており、つまり 2 つの部分から為っている。島のこちら側は 36 間 (36 ファソム) あり、向こう側は 96 間である。]

OED にある開国後の比較的新しい用例文では、上位・下位の単位との関係がさらに詳しく述べられている。“The *chō* is further subdivided into 60 *ken* and the *ken* again into 6 *shaku*, the *shaku* being about 11.9 English inches” (E. M. Satow & A. G. S. Hawes, 1884, *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*, 2nd ed.) [1 町はさらに 60 間に細分され、1 間は今一度 6 尺に分けられる。1 尺は英国の 11.9 インチくらいである。]

OED には日本語から他に 2 つの同綴同音異義語が採録されているが、これらは『日本誌』には現れない。1 語目は近代の地方行政単位「県」である。「政体書」(慶応 4 年太政官達第 331 号) 及び「藩を廃し県を置く」(明治 4 年太政官布告第 353 号) によって成立した「県」が『日本誌』に見つかる筈もない。もう一方は「拳」であるが、これは OED に「手を使い、身振りを伴って行われる勝負を決める日本の遊戯」と定義されている。こちらは現在の日本においても、あまり使われない語だと思われるが、「じゃんけん」の「けん」としては日常的に使われている。

3・24 Kiri (kiri)

桐。ゴマノハグサ科キリ属の落葉広葉高木で、東アジア原産。木材は湿気を取り、火に強く、変形も少ない。また、木目が美しく、軽い。そのため、高級材として簞笥などに用いられる。桐紋は皇室の副紋として、また、日本国の国章に準じるものとして使われている。

OED には *Suppl. 2* から採録され、用例文は 6 例ある。

定義文には “= PAULOWNIA” とのみある。初出例は『日本誌』からの “*Kiri*, is a very large but scarce Tree.” [桐は巨木であるが、需要に比べて供給の少ない樹木である。] であり、これは日本の農作物を評している部分からの抜粋で、続けて桐の実から油を採ったとの記述がある。

3・25 Kirin (kirin)

麒麟。中国の伝説上の瑞獣で、東アジアで広く知られている。『大辞林』(2006) には「中国古代の想像上の獣。体は鹿、尾は牛、ひづめは馬、額は狼。頭に肉に包まれた一本の角があり、体の毛は黄色、背には五彩の毛がある。翼をもってよく飛び、生草は踏まず、生物は食わないという。聖人が出て王道が行われた時に現れると伝えられる。一角獣。」とある。

OED には *Suppl. 2* から採録され、6 つの用例文が挙げられている。初出例は『日本誌』からの “*Kirin*, according to the description and figure, which the Japanese give of it, is a winged Quadruped, of incredible swiftness, with two soft horns standing before the breast, and bent backwards, with the body of a Horse, and claws of a Deer, and a head which comes nearest to that of a Dragon.” [日本人が描写するところによれば、麒麟は翼を持った四脚獣で、信じられないほどの駿足である。胸の前には後ろに向かって曲がった 2 本の柔らかい角があり、馬の体に鹿の蹄、そして龍の頭にも似たような頭部を持つ。] である。

『日本誌』の本文には、これに続けて “The good nature and holiness of this Animal are so great, that they say, it takes special care, even in walking, not to trample over any the least Plant, nor to injure any the most inconsiderable Worm, or Insect, that might by chance come under its feet.” [この獣の快活で親切、且つ神聖である性質はとても崇高なものである。日本人によれば、麒麟は歩く時でさえ、たまたま足元に入ってしまったどんなにつまらない植物も、また、どんなに小さな虫も踏みつけたり傷つけたりしないよう、特別な注意を払っているのである。] とある。『日本誌』の描写は、仔細については異なっているものの、『大辞林』の記述とほぼ共通していると思われる。

OED の定義文には「合成された肢体を持つ伝説上の獣で、日本の陶磁器や美術品によく描かれている。kylin に同じ」とある。OED に挙げられている他の用例は、日本の陶磁器を扱った専門書からの引用である。『日本誌』に現れるのは上述の 1 回だけであり、この文は「日本の空想上の生物」の説明に出ている。

3・26 Koi (koi)

鯉。コイ科コイ属の淡水魚で、流れが緩やかな川や池な

どに生息する。雑食であり、水草や雑草、貝類や甲殻類、昆虫や蚯蚓、小魚や魚卵など、何でも食す。

OED には *Suppl. 1* から登場する語であるが、*Suppl. 2* で大幅に加除修正がなされている。OED において、このような大幅な改変は珍しいことである。定義は「日本における鯉の呼称、*Cyprinus carpio*」である。

用例文は 6 例あり、その初出例は『日本誌』から “*Koi is another sort of it [sc. Steenbrass], which also resembles a Carp.*” [鯉はその魚の別種で、*carp* に似ている。] である。ケンペルは「*carp* ≠ 鯉」と思っていたことになる。また、角括弧の編註は *it* の指示対象を表している。東京成徳英語研究会 (2004: 174–175, n. 2) も指摘している通り、文法上この *it* を *Steenbrass(em)* と解するには無理があり、*Suppl. 1* で示されている *Mebaar* の方が適切であろう。『日本誌』の該当箇所は “*Mebaar is a red colour'd fish, in bigness and shape not unlike a Carp, or Steenbrassem, with the Eyes standing out of the head like two balls. . . . Koi is another sort of it, which also resembles a Carp, and is sometimes one Sackf and a half long.*” [眼張は赤い魚で、大きさや形は *carp* (あるいは *Steenbrassem*) に似ており、目が 2 つの球のように頭から飛び出ている。……。鯉はその魚の別種で、これも *carp* に似ており、1 尺半の長さになるものもある。] となっている。日本の水産物についての記述中に見られる。

この語は OALD⁸ (2010) にも採録されており、「日本原産の大型魚で、しばしば池に飼われている」とある。

3・27 Koitsjaa (koi-cha)

濃茶。茶の飲み方の 1 つ。たっぷりの抹茶に少量の湯を注ぎ、茶筌で練ったものを供すため、濃い緑色の粘り気の強い液体となる。少人数の茶事では 1 つの碗の茶を主客より順に廻し飲む。対して、薄茶は薄緑色の粘り気の無い液体で、一般的には一人一碗ずつ点てる。「薄茶」は、OED には用例中に 1 回あり、『日本誌』には見当たらない。

OED には *Suppl. 2* から見られ、「日本において、濃く練られて厳かに飲まれる粉末の茶」とある。用例文は 5 例が挙げられている。その初出例は、『日本誌』の附録からであり、茶の木や葉、飲み方や効能などを詳しく説明している部分からの引用である。“*This powder is mix'd with hot water into a thin pulp, which is afterwards sip'd. This Tea is call'd Koitsjaa, that is, thick Tea, by way of distinction from the thinner Tea, made only by infusion, and it is that which all the rich people and great men in Japan daily drink.*” [この粉は湯と混ぜられ、薄いがどろどろとしたものにされた後、啜られる。このような茶は濃茶と呼ばれるが、これはより稀薄な茶と区別するためであ

る。その薄い茶は、煎じ出すだけで入れられ、日本の富を持つ人々や偉人が日常的に飲んでいるものである。]

この説明を見る限り、ケンペルの捉えた *Koitsjaa* は「薄茶」であり、より稀薄な茶というのは「煎茶」であると思われる。よって、「濃茶」の説明は『日本誌』にはないことになるが、それでもケンペルは茶の文化や哲学を理解しようとし、ある程度の精度で記述している。

OED の第 2 例には *usu-cha* が見られるが、これが唯一の出現箇所である。“*The resulting beverage resembles pea-soup in colour and consistency. There is a thicker kind called koi-cha, and a thinner kind called usu-cha.*” (B. H. Chamberlain, 1890, *Things Japanese: Being Notes on Various Subjects Connected with Japan*) [その結果できた飲み物は、色も密度も干し豌豆で作った濃いスープに似ている。濃茶と呼ばれる濃厚なものと、薄茶と呼ばれる稀薄なものがある。]

3・28 Kokf, Koku (koku)

石。日本の容積の単位で、2 系統ある。1 つ目は、尺貫法における容積の上位単位であり、1 石 = 10 斗、1 斗 = 10 升、1 升 = 10 合の 10 進法である。メートル法に換算すれば、約 180 リットルである。もう一方は、和船の積載量の単位で、10 立方尺 ≈ 0.278 立方メートルである。

OED には *Suppl. 2* から採録され、これらの語義が的確に示されている。用例文は 9 例が挙げられており、初出例はこれも『日本誌』からである。日本の皇位継承と歴史に関して書かれている部分の「第 113 代キンセン天皇」の項に出現する。(西暦年代や事項の記述から、第 112 代靈元天皇のことと思われる。南北朝や廢帝の扱いの違いにより代数が異なり、「キンセン」というのは「今上」の読み違いと思われる。) OED には『日本誌』の文の一部が引用されているが、以下はその全文であり、下線部が OED に引かれている部分である。

In the eleventh year, on the ninth day of the fifth month, a fire broke out at the Dairi's court, which burnt with such fury, that great part of the city of Miaco itself was laid in ashes, and because it unluckily happen'd, that among other buildings several publick granaries were destroy'd by the fire, the Emperor, for the ease and comfort of his Subjects, order'd, that three Koku's of rice should be given, or lent to any family, that stood in need of it, as is done frequently in time of famine. [在位 11 年目の皐月九日に宮中で火災が発生し、激しく燃えて都が焼け野原と化した。この大火により他の建物と共に公の穀倉の幾つかも運悪く焼けてしまったため、天皇は人

臣を安心させ、慰めるために、米 3 石を必要としている全ての家族に給与または貸与するよう命ぜられた。これは食糧難の時によく行われることである。] 寛文 13 年 (1673 年) に関白鷹司房輔の屋敷から出火した火災で内裏を含む広範囲が焼失しているが (寛文の大火)、そのことを述べたものと思われる。

『日本誌』にはこの他にも日本の地方行政区分、長崎の成り立ち、長崎とその周辺の行政機構などについて書かれている部分にも多く見られる語である。

3・29 Konjakf (koniak, koniaku)

蒟蒻。サトイモ科コンニャク属の多年草。インドまたはインドシナ半島原産。地下の球茎は「蒟蒻芋」と呼ばれ、これに含まれる多糖類を凝固させた食品も蒟蒻と呼ぶ。

OED には *Suppl. 2* から登場する。定義文には「学名 *Amorphophallus rivieri* のその地方での呼び名で、サトイモ科の大型草本。根から粉末を取るために日本で栽培されている」とある。用例文は 5 例あり、その初出例は『日本誌』よりも新しく、“The konjak is a tuberous plant of the family Araceae, extensively cultivated by the Japanese.” (A. de Candolle, 1884, *Origin of Cultivated Plants*, trans.)

[蒟蒻は塊茎のあるサトイモ科の植物で、日本人によって盛んに栽培されている。] である。この例は植物そのものを指しているが、残りの 4 例は食品についての文である。

『日本誌』には 1 回出現しているが、これは日本の農作物について書かれている部分にある。ここで、ケンペルは凝固させる前の状態を述べていると思われる。その例は、“Some indeed they know how to deprive of their hurtful and venomous qualities. Thus out of the *Konjakf*, which is a poisonous sort of a *Dracunculus*, they prepare a sweet mealy pap.” [有害・有毒の特性を持つものもあるが、彼らはそれを取り除く術を知っている。例えば、蒟蒻は毒のあるドラクンクルス属の一種であるが、香りのある粉質の粥に作られる。] である。なお、ドラクンクルス属はコンニャク属の近隣属である。

3・30 Kuge (Kuge)

公家。儀式と文治を以って天皇・朝廷に仕える宮廷貴族・上級官人。中世以降は政権が武家に移ったが、特に江戸時代においては専ら文化を担い、古くからの伝統文化が今でも残っているのは彼らに依るところが大きい。

OED には *Suppl. 2* から採録され、その定義は「日本の封建時代において、京都の朝廷に仕えた貴族たちの名称。宮廷貴族」である。OED に挙げられている用例文は 7 つあるが、その初出例は “The heads and beards of his ministers are shauen, they haue name Cangues.” (R. Willes &

R. Eden, 1577, *The History of Trauayle in the West and East Indies*, trans.) [家臣たちの頭髪や顎鬚は剃られており、彼らは Cangue の名で呼ばれている。] である。

第 2 例は『日本誌』からの “The whole Ecclesiastical Court in general assumes the title of Kuge, which signifies as much as Ecclesiastical Lords, and this they do by way of distinction from the Gege.” [廷臣は総称的に公家という称号で呼ばれ、これは精神的貴族とでもいうような意味である。下家と区別するためにそのように呼ぶのである。] である。殿上人と地下人のことと思われる。『日本誌』において「公家」は、この他、京都の行政機構について書かれた部分や、旅行記に出現する語である。

3・31 Matsuri, Matsusi (matsuri)

祭。寺社で行われる厳粛な儀式、祝事、祭礼。また、地域社会における伝統的な祭事。OED には「崇拝者の日常生活において、神々に対する意識を高めるため、各神社で定期的に行われる厳粛な儀式や祭祀」と定義されている。

OED には *Suppl. 2* から採録されている語である。5 つある用例文のうち、初出例は『日本誌』から “It is a custom which obtains in all cities and villages, to have two such Matsuri’s celebrated every year with great pomp and solemnity in honour of that God, to whose more particular care and protection they have devoted themselves.” [さらなる格別の御加護を求めて身を捧げてきたその神を讃へ、毎年 2 回そのような祭礼をたいそうな華やかさと荘厳さを以って執り行うというのが、全ての町村の慣習である。] である。『日本誌』には年中行事の紹介、長崎の描写、そして紀行文など、様々な場面に現れる語である。

3・32 Midsu (miso)

味噌。大豆や麦などの穀物に麴や塩を混ぜ合わせ、発酵させることによって作られるペースト状の発酵調味料。非常に多くの種類が存在し、その材料や産地などによって、赤味噌・白味噌・調合味噌、米味噌・麦味噌・豆味噌・合わせ味噌などがある。OED にある定義は「大豆と大麦または米麴から製造され、日本人が様々な料理を作る時に使われるペースト状のもの」である。

東京成徳英語研究会 (2004: 227–228) は、味噌には「自慢」の意味が古くからあり、これが OED に載っていないのは何故かという疑問を呈している。しかし、この語義が OED に載っていないというのは、ごく自然なことであろう。英語での使用を記述している辞典であるから、日本語での使用を記述する必要は全くない。

OED には *Suppl. 2* から採録されており、用例文は 5 つが挙げられている。その初出例は『日本誌』より “Of the

Meal of these Beans is made what they call *Midsu*, a mealy Pap, which they dress their Victuals withal.” [粗挽きした大豆から彼らが味噌と呼ぶものが作られる。味噌はどろどろした食品で、彼らはこれを使って食品の下拵えをする。] である。『日本誌』にはこの1回しか出現せず、日本で栽培されている穀物について書かれた部分にある。

OALD⁸ (2010) にも載っており、「豆から作られたもので、日本料理に使われる」とある。英語にも *soybean paste* や *soy paste* のような訳語はあるが、‘*miso soup*’ のように *miso* もかなり広く使われているようである。実際、Google で単純な検索をしてみた結果、*miso* は *soybean paste* や *soy paste* と比べて約10倍の数となった。

3・33 Mikaddo, Mikaddi (Mikado)

帝。日本の君主号。歴史的な文献や敢えて古式な書き方をする時を除き、現代では「天皇」を使う。19世紀半ば以前の英語文献では *Dairi* (前稿3・8項参照) が多く使われている。現在では、いずれの日本語借用語 (*Dairi*, *Mikado*, *Ten'no*) よりも *Emperor* を使うことが多いが、これは外交文書などにこの英訳が使われるからであろう。

OED には初版から取り上げられている語である。定義は「日本の帝王 (*emperor*) の肩書」と簡単に記述されており、その定義に続けて「帝を聖界の (*spiritual*) 帝王、將軍 (1867年までは事実上の支配者であった) を第2の帝王または俗界の (*temporal*) 帝王と見做すのがヨーロッパ人の慣例的な表現の仕方であった」と細字で註釈が付けられている。これは、*Dairi* の項で述べたことと合致し、下の OED の用例文にも見られる。

OED にある5つの用例文のうち、初めの2例が『日本誌』からの引用である。1つ目は “In Spiritual Affairs, they are under the absolute jurisdiction of the Mikaddo.” [聖界の出来事では、彼らも無条件に帝の管轄下にある。] であり、2つ目が “The Secular Monarch professes the religion of his forefathers, and pays his respect and duty once a year to the Mikaddo.” [俗界の君主(將軍)は父祖を祀り、帝にも毎年1回伺候し、進献する。] である。

OED の第2版には語義がもう1つ登録されており、「ミカドキジ。臺灣島に固有の雉で、学名は *Syrmaticus mikado*。東京の帝室収蔵品にあった標本について1906年に記述・命名された」とある。この語義については参考例1つを含め、5つの用例文が示されているが、それらに関してここで検討するのはやめておく。

Mikadoate 「帝の地位、また、その職」なる派生語も採録されている。用例文は1つで、“The mikadoate of old Japan entered upon its final stage” (Apr. 1899, *the English Historical Review*) [古代日本の親政はその最終段階

に入った。] が挙げられている。派生語が存在するという事は、*Mikado* の語が英語として定着し、少なくとも過去のある時点においては結構な頻度で使われていたことを示している。OALD⁸ (2010) にも「昔、日本の天皇に与えられていた称号」として採録されている。

3・34 Mome, Momi (momme)

匁。尺貫法で質量を表す単位。OED の定義は「日本の重さの単位で、3.75グラムと等価」となっている。日常的に使われることはなくなったが、真珠の重さの単位としては現在でも国際的に使われている。

OED には初版から採録されている語である。その後、*Suppl. 2* と第2版で改訂が行われており、最終的な用例文の数は7つとなっている。そのうち、初めの2例が『日本誌』からの引用である。1例目は “The yearly value of the *Cobanj*. is from 55 to 59 *Mome*, or *Maas* in silver.” [小判の価値は、年によって銀55匁から59匁の間である。] であり、2例目が “The highest value of the *Cobang*, as current in the country, is of sixty *Momi*, or *Maas*, of silver.” [この国の相場における小判1枚の最高値(さいたかね)は銀60匁である。] である。これらの用例文から、「匁」が古くは銀貨の秤量単位としても使われていたことがわかる。

3・35 Moxa (moxa)

艾。蓬葉の裏にある繊毛を精製したもので、灸に使用する。不純物のない艾を作るには多くの手間が掛かるため、高価である。OED には初版から登場している語である。

OED の第2版には2つの語義が載っている。第1義は艾そのもので、OED には「乾燥した *Artemisia moxa* (蓬) の葉の細柔毛。特に、痛風などの対向刺戟として皮膚上で燃すために、円錐形または円柱形に成形したもの。また、蓬の草そのもの」とある。この語義には4つの用例文があり、初出例は “He did me the favour to shew me some of that Moxa, which by burning it upon any gouty part removeth the Gout.” (1677, *Philosophical Transactions of the Royal Society of London* 12) [彼は親切にも、その艾を少し私に見せてくれた。痛風に罹っている任意の部分に乗せて燃すことによって痛風を治すのである。] である。

第2義は、派生的な語義で、「艾のように皮膚の上で燃すためのもの」とあり、つまり、艾の代わりに使われるものである。用例文は3つあり、その初出例は “The material generally employed in Europe for moxas is cotton, rendered downy by carding, and made into a roll an inch long, and from half an inch to two inches in diameter.” (1833, *the Cyclopaedia of Practical Medicine*) [ヨーロッパで一般的に艾の代わりに使われるのは綿である。その綿

は、梳くことによって細柔毛にされ、長さ 1 インチ、直径 $\frac{1}{2}$ ~ 2 インチの円筒形に丸められている。] である。

OED には *moxibustion*, *moxocausis* という派生語も採録されている。共に「皮膚の上に艾を燃す行為」と定義されている。用例文は合わせて 4 つあり、その初出例は “Moxibustion. also serves as a prophylactic.” (M. Neuburger, 1910, *History of Medicine*, trans. by E. Playfair) [灸を据えることは予防措置としても施される。] である。

『日本誌』には数回現れる。先ず、日本の農作物の蓬を説明する部分にある。そして、巻末の附録に鍼灸について詳しく説明した部分にある。その附録から、使用例を 1 例挙げておく。 “Moxa is a soft down, or flaxy substance, of a grey or ash-colour, very apt to take fire, though it burns but slowly, and with a moderate heat, there being scarce any sparkling observed, till it is quite consumed into ashes.” [艾は鼠色ないし灰色の細柔毛状または亜麻状のもので、とても着火し易いが、ゆっくりと穏和な熱を以って燃える。火をあまり見せずに、灰と尽きるまで燃える。]

3・36 Nipon, Nifon (Nippon)

日本。日本列島とその周辺の島々を領土とする国家。

OED には *Suppl. 2* から採録されており、語義は 2 つ示されている。第 1 義は「Japan を表す日本語」とあり、用例文は 5 つある。初出例は『日本誌』からで、OED で省略されている部分を角括弧内に補って以下に示しておく。

This Empire is by the Europeans call'd *Japan*. The Natives give it several names and characters. The most common, and most frequently us'd in their writings and conversation, is *Nippon*, which is sometimes in a more elegant manner, and particular to this Nation, pronounc'd *Nifon* [, and by the Inhabitants of *Nankin*, and the southern parts of *China*, *Sijppon*]. It signifies, *the foundation of the Sun* [, being deriv'd from *Ni*, *Fire*, and in a more sublime Sense, the *Sun*, and *Pon*, the *ground*, or *foundation of a thing*]. [この国はヨーロッパ人には *Japan* と呼ばれている。現地人はこの国を幾つかの名前で呼び、幾つかの書き方で表す。文書や会話で最も一般的で、最もよく使われているのは *Nippon* であり、より上品なこの国固有の言い方では *Nifon* と発音され、南京や中国南部の住民には *Sijppon* と発音されている。これは、「太陽の礎」という意味であり、「日 (に)」(火、より昇華させて太陽を意味する) と「本 (ほん)」(基盤、事物の基礎) とに由来している。]

上の文でも「にっぽん」と「にほん」の 2 つの読み方が挙げられているが、現在に至っても定まっていない。日本

政府も正式な読み方をどちらか一方には定めておらず、どちらでも良いとしている(「日本国号に関する質問主意書」内閣衆質 171 第 570 号)。但し、日本銀行券や郵便切手における国際表示には *NIPPON* が使われている。

第 2 義には “*Nippon vellum* = *Japanese vellum* (JAPANESE a. b)” とある。これは文字に起こすと「*Nippon vellum*, *Japanese* (形容詞) の語義 b にある *Japanese vellum* と同義」ということである。*Japanese vellum* は局紙とも呼ばれ、三椶を原料とする上質な和紙である。この語義には 2 つの用例文が提示されており、その初出例は “They will simultaneously issue special editions on *nippon vellum*.” (3 June 1926, *the British Weekly: A Journal of Social and Christian Progress*) [彼らは高級和紙に印刷された特別版を同時に発行する。] である。

3・37 Norimon (norimon)

乗物。1 本の長柄の中央に、人が乗る部分を固定し、前後から担いで運ぶ乗り物。「駕籠」と「乗物」の区別は、前稿 3・5 項でも述べた通り、庶民が使う粗製のものが「駕籠」、上流階級の者が使う特製のものが「乗物」である。エバンズ (1990: 159–160) は、標準語では「のりもの」と読む筈で、「のりもん」という読みは長崎地方の方言に基づいているのだと指摘している。

OED には *kago* と共に初版から登場する。定義文には「日本で使われていた *palanquin* の一種」とあり、限定用法もあることが記されている。*palanquin* はインド亜大陸で使われる一人乗りの輿または駕籠のことである。5 つの用例文が挙げられており、その初出例は “He kept hymself close in a *neremon*.” (R. Cocks, *Diary*, entry of 1616) [彼は乗物の中で窮屈にしていた。] である。

『日本誌』には何度も現れる語であり、紀行文の部分に多い。その使用例を 1 つ挙げれば、 “The *Norimon* itself is a small room, of an oblong square figure, big enough for one person conveniently to sit or lie in, curiously twisted of fine thin split *Bambous*, sometimes japan'd and finely painted, with a small folding-door on each side, sometimes a small window before and behind.” [乗物そのものは細長い四角形の小さな部屋である。人が 1 人心地良く座ったり横になったりできる程の大きさで、こまかく細く割かれた竹で編まれており、漆が塗られたり綺麗に彩られるものもある。両側に小さな折戸があり、小さな窓が前後についているものもある。] といったふうである。

3・38 Obani, Ubang (obang)

大判。16 世紀末から 19 世紀半ばまで流通した日本の高額金貨で、その価値は時代によって変動した。実用という

よりも、寧ろ儀礼・贈答用に鑄造された。長さが約 17 センチメートル、幅が約 10 センチメートル、重さが約 161 グラムという実用には不向きな大きさの貨幣であった。

OED には **cobang** と共に初版から採録されている。定義文には「日本で以前流通していた金貨で、角の丸い長方形をしている。小判 10 枚の価値に相当する」とある。「角の丸い長方形」とは楕円形のことであり、小判 10 枚というのは表に「拾兩」と墨書されていることからの誤解であろう。10 兩というのは、含まれている金の量目である。

OED には用例文が 3 つあるが、その初出例は “A thousand *Oebans* of Gold, which amount to forty seven thousand *Thayls*, or crowns.” (1662, *the Voyages and Travels of J. A. de Mandelslo into the East-Indies*, trans. by J. Davies) [大判 1,000 枚、これは 47,000 両 (クラウン銀貨 47,000 枚) に相当する。] である。

『日本誌』には旅行記中で大坂城の描写と埋蔵金の噂についての記述、附録中で高価な茶葉についての記述の 3 箇所に出現する。大坂城については以下のように書かれている。“In this third and uppermost castle there is another stately tower several stories high, whose innermost roof is cover’d and adorn’d with two monstrous large fish, which instead of scales are cover’d with golden *Ubangs* finely polish’d, which in a clear sun-shiny day reflect the rays so strongly, that they may be seen as far as *Fiongo*.”

[この 3 番目で最も上の郭 (本丸) にはもう 1 つ何階か建ての荘厳な塔 (天守) がある。その最も内側の屋根は 2 つの途方もなく大きな魚 (鱈) で飾られている。この魚は鱗ではなく、精巧に磨かれた金の金判で覆われており、よく晴れた日には陽光をととも強く反射して兵庫 (神戸) から見え望める程である。]

3・39 Rinsaiifa (Rinzai)

臨濟宗。仏教 (禅宗) の宗派である。日本における禅宗は臨濟宗、曹洞宗、黄檗宗の 3 つに大別される。臨濟宗は中国で 9 世紀後半に成立し、日本には 12 世紀に伝来した。

東京成徳英語研究会 (2003) に収録されていることからわかるように、OED には *Additions Series* で初めて登場する。定義文は「禅仏教の 3 つの主要な分派のうちの 1 つ。Soto, Obaku 参照」となっている。用例文は 4 例が挙げられており、その初出例は『日本誌』よりも新しい “There are now in Japan the following sects.. 1. Zen; of which there are three subdivisions, viz. Rinzai, Syootoo, and Oobate, named after Chinese monks.” (1833, *Chinese Repository* 2) [現在、日本には以下のような宗派が存在している。……。1. 禅。これにはさらに 3 つの派に分けられる。即ち、臨濟・曹洞・黄檗であり、これらは中

国の僧に因んで名付けられている。] である。

『日本誌』には **-fa** のついた形で 1 回使われている。この **-fa** は、日本語の接尾辞「派」であり、OED の **Rinzai** の項には少なくとも参考例としては取り上げておいて欲しい所である。長崎の寺社について述べた部分に “*Siun-tokusi*, is another of the chief temples of the *Sensju* Sect, of the order of *Rinsaiifa*.” [春徳寺は禅宗臨濟派の主要寺院のもう 1 つである。] とある。

3・40 Rissiu (Risshu)

律宗。「唐代初期に成立した仏教の宗派で、8 世紀に日本に紹介されて盛んになった。日本では主に戒律と受戒の研究が中心であった」と OED の定義文にあり、要を得ていると思われる。754 年に鑑真によって齎されたのはこれである。OED には **Ritsu** の別綴りとして載っている。

その結果、用例文は **Ritsu** のものに統合されてしまっており、実際に **Risshu** が使われている例は 1 つしかない。それも、かなり新しい “After the establishment of this new Kaidan, the *Risshū* seems to have declined though it somewhat revived in the twelfth century.” (C. N. E. Eliot, 1935, *Japanese Buddhism*) [律宗は、この新たな戒壇院が創建された後は、12 世紀には幾分か甦ったものの、衰退したようである。] である。

『日本誌』には以下の 1 回使われており、OED にもこれを挙げると良いのではなかろうか。“*Siusi Oboj ji*, or a List of all the sects and religions profess’d at *Miaco*, together with the number of Persons, who adhere to the same: *Ten Dai Siu* 1009; *Singon Sui* 18095; *Sen Siu* 16058; *Rissiu* 9998; *Fosso Siu* 5513; *Fokke Sui* 97728; *Sioo Dosui* 159113; *Dai Nembudsiu* 289; *Nis fonguan Si siu* 54586; *Fogas fonguan si siu* 99016; *Bukkwoo si siu* 8576; *Takkada siu* 7576.” [宗旨覚、つまり、都において信仰されている全ての宗旨とその信者数の一覧。天台宗 1,009、真言宗 18,095、禅宗 16,058、律宗 9,998、法相宗 5,513、法華宗 97,728、浄土宗 159,113、大念仏宗 289、西本願寺宗 54,586、東本願寺宗 99,016、仏光寺宗 8,576、高田宗 7,576。]

3・41 Rit (Ritsu)

前項に同じ。OED での見出しはこちらの綴りである。参考例 1 文の他、用例文が 4 つ示されているが、これには上掲の **Risshu** の例も含まれている。参考例は『日本誌』からで、「参考」としたのは、綴りの違いからであろう。この綴りは、無声母音を的確に表していると思われ、考え方によっては寧ろ正しいと言える。このような無声母音はケンペルの時代には存在していたという (宮島 1961; 安

井 1988)。その参考例を以下に提示しておくが、下線部が OED に引かれている部分である。

In the twelfth year, in the second month, a Court of Enquiry was held, by special command of the Emperor, in his Capital of *Miaco*, when it appear'd, that in the 1850 streets of this city, there were 1050 of the *Ten Dai's* Religion, 10070 of the sect *Singon*, 5402 of *Fosso*, 11016 of *Sen*, 122044 of *Seodo*, 9912 of *Rit*, 81586 of *Jocke*, 41586 of *Nis Fonguans*, 80112 of *Figas Fonguans*, 7406 of *Takata Monto*, 8306 of *Bukwoo*, 21080 of *Dainembuds*, 6073 of the sect of *Jammabos*, that is in all 405643 (the *Dairi's* Court not computed) 182070 of which were males, and 223573 females. [「キンセン天皇」

(3・28 項参照) 在位 12 年目の如月に、天皇の勅命により都で宗門改が行われ、以下のような調査結果であった。1,850 ある都の街路に天台宗 1,050 人、真言宗 10,070 人、法相宗 5,402 人、禅宗 11,016 人、浄土宗 122,044 人、律宗 9,912 人、法華宗 81,586 人、西本願寺宗 41,586 人、東本願寺宗 80,112 人、高田門徒 7,406 人、仏光寺宗 8,306 人、大念仏宗 21,080 人、山伏信仰 6,073 人の総計 405,643 人がおり、これには官人は含まれていない。このうち 182,070 人が男性、223,573 人が女性である。]

用例文としての初出は “The Ritsu, introduced by the Chinese priest Kanshin, under the empress Koken.” (E. J. Reed, 1880, *Japan: Its History, Traditions, and Religions, with the Narrative of a Visit in 1879*) [孝謙女帝の時代に中国僧の鑑真によって齋された律宗。] である。

3・42 Riuku, Liquejo, Liquejo, Leuconiaë (Ryukyu)

琉球。九州と臺灣島との間に連なる南西諸島のうち、南部にある島々の総称。また、15 世紀から 19 世紀にかけて琉球諸島を中心に統治した王国。東アジア海洋貿易の拠点として繁栄した。1609 年に薩摩に侵攻されると、明・清の冊封を受けると同時に、薩摩藩の附庸国として徳川幕府にも使節を派遣しつつ、国家の体裁を保った。「藩を廃し県を置く」(明治 4 年太政官布告第 353 号) で一度は鹿児島県の管轄となるが、「琉球国王尚泰を藩王となし華族に陞列するの詔」(明治 5 年 9 月 14 日詔勅) により琉球王国が廃止され、琉球藩となった。その後も清への朝貢は続けたが、「琉球藩を廃し沖縄県を置く」(明治 12 年太政官布告第 14 号) により名実ともに日本の領土に編入された。

OED には *Additions Series* から登場し、*Ryukyuan* と同義とされている。OED の編纂方針のため、純然たる固有名詞としては採録されておらず、限定用法としての

Ryukyu である。7 つの用例文が挙げられており、その初出例は “The Korean, Formosan, Li-kyu, or rather Riu-kiu languages.” (1808, *Asiatick Researches* 10) [朝鮮の、臺灣の、琉球の言語。] である。Li-kyu, or rather Riu-kiu とあるのは、中国語・日本語・琉球語の間の発音の揺れを示しているであろう。

『日本誌』には周辺国の説明などに現れるが、全てが琉球諸島や琉球王国と言った固有名詞である。編纂方針上、OED に正式な用例文として掲載されるのは難しいかもしれないが、参考例にはなるのではなかろうか。『日本誌』での使用例を 1 例挙げておく。“The Pearls are found in the gulph of *Omura*, Ambergrease upon the coasts of the *Riuku* islands, and of the Provinces *Satzuma* and *Kijnokuni*, crystals and precious stones in *Tsugaru*.” [真珠は大村湾に、龍涎香は琉球諸島・薩摩国・紀伊国の海岸帯に、水晶や宝石は津軽に見られる。]

3・43 Liqueans, Liquejans (Ryukyuan)

琉球人。OED には名詞と形容詞の 2 義が挙げられている。前者は「琉球諸島出身の人や琉球諸島の住民。また、そこで話されている日本語の方言群 (または、そのいずれか)」であり、後者は「琉球諸島の、琉球人の、琉球方言の。また、琉球諸島、琉球人、琉球方言に関する」である。

OED には *Ryukyu* と同時に *Additions Series* に現れており、用例文は 5 つ挙げられている。その初出例は “In 1871..66 Ryūkyūans drifted to Taiwan or Formosa.” (Japanese National Commission for UNESCO, 1958, *Japan: Its Land, People and Culture*) [1871 年に 66 人の琉球人が臺灣、つまりフォルモサに漂着した。] である。フォルモサとは、臺灣島のヨーロッパにおける別称・雅称であり、葡 *Formosa* (美しい) を語源としている。

『日本誌』には外国との貿易に関して書かれた部分に出てくる語である。例文を 1 つ挙げておく。“The Liquejans being subjects of *Japan*, you shall take none of their ships or boats.” [琉球人は日本の臣民であるから、彼らの船や舟を奪ってはならない。]

3・44 Sager (sakura)

桜。北半球の温帯に広く分布するバラ科サクラ属サクラ亜属の落葉広葉樹。春に白色や淡紅色、濃紅色の花を咲かせる。春の花の代名詞であり、日本の国花でもある。

OED には *Suppl. 2* から採録され、定義は「多種のサクラ属から派生した多くの品種のいずれかに属す花をつける桜の木。また、この種の木の花や木材」である。用例文は 6 つあり、その初出例は “*Yoshino*..once the residence of the anti-emperors, a famous old place with many *Sakura*

(*Prunus pseudocerasus*).” (1884, *Japan: Travels and Researches*, trans. by J. J. Rein) [吉野は、かつては反天皇派の本拠地で、古くから多くの桜で有名な土地である。] である。反天皇派とは南朝のことで、これが書かれた時点では北朝正統説が採られていたのであろう。また、吉野の桜はヤマザクラで、*Prunus pseudocerasus* シナミザクラではない。因みに、ヤマザクラの学名は *P. jamasakura*、最も有名な品種のソメイヨシノは *P. ×yedoensis* である。

『日本誌』には “Some few flower-bearing plants planted confusedly, tho’ not without some certain rules. Amidst the Plants stands sometimes a *Saquer*, as they call it, or scarce outlandish tree, sometimes a dwarf-tree or two.” [花の咲く植物があちこちに乱れて植えられているが、全く規則性がない訳ではない。色々な植物の中には、彼らが桜と呼んでいる珍しい異国の樹があったり、小さな木(盆栽?)が1、2本あったりする。]と、庭の描写に1度ある。OED が取り上げなかったのは、この奇妙な綴りのためであろうが、文脈からこれが桜であることは間違いないと思われる。*Saquer* の転写ミスとも考えられる。

3・45 Sake, Sackee, Saki, Sakki, Sacki, Sacci (saké)

酒。米を発酵させて醸造するアルコール飲料。また、広義には、エチルアルコールを含む飲料全般を指し、日本語では一般的にこちらの用法が多い。事実、法律文などにおける「酒」「酒類」はこの広義の意味であるが、英語ではこの意味はなく、日本酒のみを指す。OED の定義文にもこの点は反映されており、「米から造られる日本の発酵酒類(それ故、日本人にはアルコール飲料全般の呼称として用いられている)」となっている。

OED の日本語借用語は標準的な欧文アルファベットで表記されているものが殆どであるが、*saké* には珍しく発音区別符号が使われている。これは、*make, cake, fake* などの *-ake* との類推で /seik/ と読ませない工夫であろう。

OED には初版から採録されており、*Suppl. 1* と第2版で改訂が行われている。第2版での最終的な用例文数は17であり、その初出例は “Their ordinary drink is a kind of Beer (which they call Saque) made of Rice.” (J. de Thévenot, 1687, *the Travels of Monsieur de Thevenot into the Levant*, trans. by A. Lovell) [彼らの通常の飲み物は米から造られるビール的一种(彼らが酒と呼んでいるもの)である。] である。

『日本誌』では地域の特産品についての記述の他、旅行記の食事の描写にも多く見られる語である。旅行記の部分から1例を挙げておく。なお、日見村も矢上村も、現在の長崎市にかつて存在した廃止村である。 “We took horses at *Fimi*, and thence came to the village *Jagami*, where we

dined, and were again treated by some of our friends, who would keep us company so far, with *Soccana* and *Sacci*.” [日見で馬に乗り、それから矢上村に着いて食事をした。そして、ここまで見送りに来てくれた友人達に肴と酒をまたご馳走になった。]

OALD⁸ (2010) には *sake* として採録されており、「米から造られた日本のアルコール飲料」とある。異綴りとして *saki* も載っている。

3・46 Samurai (samurai)

侍。武芸を以って主家に仕える者。平安時代には天皇や貴族を警護する任に当たったが、中世には全国の軍事や警察を担うまでに発展した。江戸時代には士農工商のうち士の身分の者を指した。OED の定義文には「日本で封建制度が続いていた間、大名に仕えた武人階級の1つ。時に、より広義に、侍そのものか大名かを問わず、武家に属する者。また、日本軍の将校にも使われる。限定用法もあり」とある。「日本軍将校」は「日本の武家に属する者」から派生したものと思われる。OALD⁸ (2010) にも「(過去において)日本の有力な武家の構成員」として載っている。

OED には多くの用例文が挙げられている。本義に11例、派生義に4例、限定用法に7例あり、合わせて22の用例文がある。その初出例は『日本誌』からで、この書物中に現れるのは1回である。長崎から江戸へ参勤するオランダ人に付き添う人員についての描写に出てくる。文の一部しか引用されていないが、以下はその前後文脈も含めたものであり、下線部が OED に引かれている部分である。

All these persons, besides the officers attending the *Bugio*, are look'd upon as military men, and as such have the privilege of wearing two swords. 'Tis from thence they are call'd *Samurai*, which signifies persons who wear two swords, or soldiers, all persons, that are not either noblemen by birth, or in some military employment, being by a late Imperial edict denied this privilege. [奉行に随行する役人を除き、これら全ての人々は武家と見做されており、2本の刀を帯びる特権を持っている。このことにより、彼らは「侍」と呼ばれ、これは2本の刀を帯びた者、つまり、兵士という意味である。生まれながらにしての貴人でない、あるいは、武家に雇われていない全ての者は、近頃の告文によりこの特権を取り上げられた。]

3・47 Sasanqua (sasanqua)

山茶花。ツバキ科ツバキ属の常緑広葉樹で、寒い時期に花を咲かせる。OED には「日本原産で、ツバキ科に属す

常緑灌木。学名 *Camellia sasanqua*。良い香りの白ないし薄紅色の花を付ける。また、食用油を産し、絹や石鹼の生産にも使われる実を結ぶ」とある。

OED には 4 つの用例文が挙げられている。その初出例は “*C. Sasanqua* (*Sasanqua* is the Japanese name of the plant) is found in many parts of China and Japan.” (J. Lindley & T. Moore, 1866, *The Treasury of Botany*) [ツバキ属サザンカ (山茶花はこの植物の日本名である) は中国や日本の至る所に見られる。] である。日本語借用語は括弧の中の *Sasanqua* であり、括弧の前の *C. Sasanqua* は借用語ではなく学名である。

『日本誌』には附録の茶葉に関する記述に出てくる。OED の見出しの綴りと同じであるのに、編纂者がこの使用例を見逃したのは不思議である。“Some put it up with common Mugwort flowers, or the young leaves of the Plant call'd *Sasanqua*, which they believe adds much to its agreeableness.” [蓬の花、または、山茶花と呼ばれる植物の若葉と共に保存する人もいる。このことによって茶葉の嫌味を取り除くと彼らは考えている。]

3・48 Sasen (zazen)

坐禅。仏教の基本的な修行法の一つで、特に禅宗においては根幹を為す。古代インドの修行形式を取り入れたものとされる。姿勢を正して坐り、宗教的な精神統一を実現し、無念無想の境地に入って悟りを求める。

OED には *Suppl. 2* で登場し、6 つの用例文が挙げられている。その初出例は『日本誌』からであり、仏教の始祖に関する記述からの引用である。この引用も、文の一部であるため、以下に全文を提示しておく。下線部が OED に引用されている部分である。

Under the inspection of this holy man he betook himself to a very austere life, wholly taken up with an almost uninterrupted contemplation of heavenly and divine things, in a posture very singular in itself, but reckon'd very proper for this sublime way of thinking, to wit, sitting cross-legg'd, with his hands in the bosom placed so, that the extremities of both thumbs touch'd one another: A posture, which is thought to engage one's mind into so profound a meditation, and to wrap it up so entirely within itself, that the body lies for a while as it were sens less, unattentive, and unmoved by any external objects whatsoever. This profound Enthusiasm is by them call'd *Safen* [sic: read *Sasen*], and the divine truths revealed to such persons *Satori*. [この聖人の指導の下、彼は禁慾的な生活に没頭し、天や神に関して殆ど絶える

ことのない黙考に専念した。黙考の時の姿勢は独特のものだが、この高尚な思想にとっては正に相応しい姿勢と見做されている。即ち、足を組んで坐り、両手を胸の前で親指の先が互いに触れ合うように据える。これは、各人の精神を集中させ、きわめて深い瞑想に耽らせ、精神をそれ自体の中に完全に包み込んでしまうために、暫く身体が無感覚になり、無関心になり、如何なる外物にも動かされなくなったかのようにになると考えられている姿勢である。この深く熱烈な没頭を彼らは坐禅と呼び、彼らに明らかにされる神聖な真理を悟りと呼ぶ。]

冒頭の *this holy man* は、出家した釈迦が最初に教えを求めた阿羅邏仙人のことである。また、下線部末尾にある角括弧は OED の編註であり、*Safen* とあるのは *Sasen* の間違えであることを示している。『日本誌』の活字を組んだ職人が *f* (長形の *s*) と *f* とを見間違え、誤植したものと考えられる。

この語は、長崎の寺社の描写にもう 1 箇所見られる。

3・49 Satori (satori)

悟り。迷妄を取り除くことによって会得した、死生を超えた真理。禅宗では、全ての行為が悟りへの道であると説き、“*satori is the raison d'être of Zen*” [悟りが禅の存在理由である] とされる (Suzuki 1969: 95)。

OED には 9 つの用例文が挙げられている。これには、派生語 *satoric* の用例文 1 つも含まれている。初出例は『日本誌』から “This profound Enthusiasm is by them call'd *Safen*, and the divine truths revealed to such persons *Satori*.” である。前出の *zazen* と同じ場所からの引用であるため、和訳は割愛する。

『日本誌』には他にも出現している。長崎の寺社の描写、隠元禅師 (日本黄檗宗の開祖) についての記述、茶について書かれた附録、これら 3 つの場面に使われている。

3・50 Sen (Zen)

禅。大乘仏教の一派で、「日本の仏教における 1 つの形態」(OALD⁸ 2010)。先行形態はインドに見られたが、6 世紀初めに達磨大師が中国へ伝えてから発達し、日本には 13 世紀に伝わった。坐禅を中心とした修行によって心の本性が明らかにされ、悟りが得られるとする。OED は「大乘仏教の一宗派で、瞑想と悟りとの重点を置く。中国より伝来した後、13 世紀以降に日本人の生活に影響を及ぼすようになった。」と定義している。

OED には *Suppl. 2* からの採録で、用例文は (限定用法のものを含めて) 20 例がある。そのうち、初出例は『日本誌』から “In the 1850 streets of this city, there were

1050 [families] of the *Ten Dai's Religion*,..11016 of *Sen*.”である。これは、3・41 項の *Ritsu* と同じ部分からの引用であるから、和訳は割愛する。『日本誌』にはもう 1 箇所、長崎の寺社の描写に使われている。

3・51 Senni (seni)

銭。銅や青銅などを中心にした卑金属で造られた硬貨。*seni* はヘボン式ローマ字では *zeni* になるものと考えられる。OED には *sen* の異綴りとして載っている。その *sen* の定義文には「日本の銅銭あるいは青銅銭。今日では円の $\frac{1}{100}$ 」と記されている。また、「主に集合的に複数として」との註釈も付く。

「銭(ぜに)」と「銭(せん)」は同じ漢字で書き、語源は同じかもしれないが、今では違う語であろうと思われる。「ぜに」と読む場合は硬貨の意味であり、「せん」と読む場合は通貨単位である。その点が OED では考慮されていないのが気にかかる。因みに、現金通貨単位としての銭は「小額通貨の整理及び支払金の端数計算に関する法律」(昭和 28 年法律第 60 号)により廃止されたが、現在でも「通貨の単位及び貨幣の発行等に関する法律」(昭和 62 年法律第 42 号)に基づいて銭・厘の補助単位が主に為替や株価などの端数を表現するための単位として使われている。

OED には第 2 版から登場する。6 つの用例文が挙げられているが、*seni* または *senni* の綴りで銭貨を意味するものが初めの 3 例、*sen* の綴りで通貨補助単位を表しているものが残りの 3 例である。銭貨としての初出例は『日本誌』から“The use of silver Money was forbid, and in its stead brass Sennis coin'd.”[銀貨の使用は禁じられ、その代わりとして真鍮銭が鑄造された。]であり、通貨単位としては“10 Rin = 1 Sen = $\frac{1}{2}$ d.”(F. G. D. Bedford, 1874, *the Sailor's Pocket Book*) [10 厘 = 1 銭 = $\frac{1}{2}$ 英ペニー]が初出である。

『日本誌』にはこの他、旅行記中に物の値段を記述する際に使われており、図版の説明にも 1 回見られる。

3・52 Sennin (sennin)

仙人。俗界を離れて山の中に住み、不老不死の術を修め、神通力を持つとされる人。中国の神仙思想や道教で、理想とされる神的存在。OED の定義文には「東洋神話において、元々は道教で瞑想や自己修養によって永遠の生命を獲得した老隠遁者。従って、神通力を得た人物、靈妙自在の力を身に着けた隠遁者」とある。

OED へは *Suppl. 2* からの登場で、用例文は 5 つ挙げられている。その初出例は“Figure of a Buddhist *Sennin*, playing the *Koto*, and seated on the back of a fish.”(G. A. Audsley & J. L. Bowes, 1875, *Keramic Art of Japan* [cap-

tion]) [魚の背に座り、箏を奏でる仏教の仙人の図柄]である。

『日本誌』では、仏教の歴史についての記述に見られる。固有名詞であるため、正式な用例文として挙げるのは難しいかもしれないが、1875 年より早いものとして、参考例としては適切ではなかろうか。“*Siaka*, when he came to be nineteen years of age, quitted his Palace, leaving his wife and an only son behind him, and voluntarily, of his own choice, became a disciple of *Arara Sennin*, then a Hermit of great repute, who liv'd at the top of a mountain call'd *Dandokf*.”[釈迦は 19 歳になった時、妻と一人息子を残して宮殿を去り、自らの意志で阿羅邏仙人の弟子となることを選んだ。阿羅邏仙人は、当時とても評判の良い隠者で、檀特と呼ばれる山の頂上に住んでいた。]

3・53 Seogun (shogun)

将軍。元々は征夷大将軍の略。幕府の長、武士の棟梁なるものとして鎌倉時代(1192–1333)には軍事・治安について掌り、室町時代(1336–1573)に権力を増し、江戸時代(1603–1867)には全国の政治についても掌握した。OALD⁸(2010)には「(過去において)日本の軍事的指導者」とある。

OED の定義文には「日本の軍の世襲的な最高司令官。1867 年までは日本の事実上の統治者。*tycoon* と呼ばれる」とあり、続けて細字で「権力の篡奪が続く間に将軍(大君)は日本の真の統治者となっていたが、名義上は帝の臣下であり、帝の名の下に行動した。このような事情はヨーロッパ人には誤解され、日本には 2 人の帝王(*emperor*)がいると考えられていた。聖界の(*spiritual*)帝王と呼ばれた帝(宗教的忠節の対象とされた)と俗界の(*temporal*)帝王と呼ばれた将軍である。1867 年に封建制が廃止されると、帝が実際の統治権を掌握し、将軍による統治は終わりを迎えた」と長い註釈が付く。また、「日本の封建時代に属す流行や芸術を表す限定用法として」の用法も挙げられている。

OED には初版から採録され、*Suppl. 2* で微改訂されている。用例文は、限定用法のものも含めて 7 例あり、その初出例は“His wife is sent back to her father Shongo Samme, King of Edo and to succeed in the Empire.”(R. Cocks, *Diary*, entry of 1615) [彼の妻は父である将軍様(江戸の王であり、帝国の継承者たる人)の許に返された]である。「彼」は秀頼、「妻」は千姫、「父」は秀忠であり、大坂落城の際のことを述べた文である。

第 2 例は『日本誌』の幕藩体制の成立までの経緯に関して書かれた部分より“*It was thought expedient, that the Seogun, or Crown-General, should be sent against them*

at the head of the imperial army.” [これらに対して将軍、つまり皇軍の大將を、皇軍を率いる者として差し向けることが急務であると考えられた。] である。

OED には派生語も 4 語あり、これは少なくともある時点においては英語にある程度定着していたことを示す。また、shongo, seogun, djogoun, s(h)iogoon, sjogun, zioogoon など、多くの異綴りが挙げられているが、これはローマ字規範がない時代の筆者たちが各々に聞いた通りの日本語を文字にしようとした結果で、英語への定着過程において英語化した綴りではない。(これまでに使われてきた様々なローマ字規範に関しては、日下部 (1977) 参照。)

4. その他の語の一覧

紙面に限りがあり、今回も双方に現れる語の全ては紹介し切れなかったもので、取り上げられなかったものを以下に一覧しておく。

54. *Siakf, Sak, Saku, Sakf, Sackf (shaku)* 尺
55. *Singon (Shingon)* 真言宗
56. *Sinto, Shinto (Shinto)* 神道
57. *Sintoist (Shintoist)* 神道者
58. *Siodo (Jōdo)* 浄土宗
59. *Soeju, Soje, Soja (shoyu, shoya, soy, soya)* 醤油
60. *Sotofa, Sotosju (Soto)* 曹洞宗
61. *Sugi, Suggi (sugi)* 杉
62. *Sun, Sum (sun)* 寸
63. *Tai, Tah (tai)* 鯛
64. *Tanabatta, Tannabatta (Tanabata)* 七夕
65. *Tendai, Ten Dai (Tendai)* 天台宗
66. *Tokko (toko)* 床
67. *Torij, Tori, Toori (torii)* 鳥居
68. *Tsja, Tsjaa (cha, chia)* 茶
69. *Tsubo (tsubo)* 坪
70. *Tuffon (typhoon)* 台風
71. *Udsigami (ujigami)* 氏神
72. *Urusi (urushi)* 漆
73. *Uta (uta)* 歌
74. *Wakisasi (wacadash)* 脇差

5. まとめ

『日本誌』と OED との双方に現れる日本語を見てきた。OED の扱いに問題のある語もあった。『日本誌』よりも OED の初出年が新しい語も存在しており、現在進行中の改訂作業において改められることが望まれる。また、前

回・今回で紹介し切れなかった語については、次号で引き続き、本稿の形式に従って説明・解説を加えるつもりである。

なお、本稿中、百科事典的な事項は『ブリタニカ国際大百科事典』(1988) の情報を援用している。また、OED の版による変遷は 東京成徳英語研究会 (2003, 2004) から の情報に依っていることをここに付記しておく。(続)

参考文献

- 『ブリタニカ国際大百科事典』(1988) 第 2 版. 「小項目辞典」. 全 6 巻. 東京: ティビーエス・ブリタニカ.
- 『大辞林』(2006) 第 3 版. 東京: 三省堂.
- Doi, S. (2010) 'Japanese Loanwords in the *Oxford English Dictionary* and in the English version of Kämpfer's *the History of Japan*'. In T. Fujita, S. Suzuki, & N. Matsukura (Eds.), *The Future of English Studies* (pp. 84–99). Tokyo: DTP Press.
- 土居 峻 (2011) 『日本誌』及び『オックスフォード英語辞典』の双方に現れる日本語]. 『愛知工業大学研究報告』46: 31–42.
- エバンズ・M・年恵 (1990) 『英語になった日本語: ことばにみる最新アメリカ事情』. 東京: ジャパンタイムズ.
- Kämpfer, E. (1728) *The History of Japan* (J. G. Scheuchzer, Trans. & Ed.). 2nd impression. 2 vols. London. (Facsimile reprint published in 1977 from Yushodo Booksellers, Tokyo)
- 日下部 文夫 (1977) 「日本のローマ字」. 『岩波講座日本語 8: 文字』(pp. 341–383). 東京: 岩波書店.
- 宮島 達夫 (1961) 「母音の無声化はいつからあったか」. 『国語学』45: 38–48.
- [OALD⁸] *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (2010) 8th ed. Oxford: Oxford University Press.
- The Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM* (2002) Version 3.0 for Windows. Oxford: Oxford University Press.
- Suzuki, D. T. (1969) *An Introduction to Zen Buddhism* (C. Humphreys, Ed.). London: Rider.
- 東京成徳英語研究会 (編) (2003) 『西洋の日本発見: OED Additions Series に見られる日本語』. 東京: 東京成徳短期大学.
- 東京成徳英語研究会 (編) (2004) 『OED の日本語 378』. 東京: 論創社.
- 安井 篤 (1988) 「日本語母音の無声化について」. 『福岡大学人文論叢』20: 387–405.
- (受理 平成 24 年 3 月 19 日)